

Innovation Times

SDGs 横浜の挑戦

Vol.13

企画・制作=神奈川新聞社 企画推進室



温室効果ガス削減 市民、企業、行政一体で

市民と企業、大学、行政などが手を携え、温暖化対策を次々と実行している団体がある。「横浜地球温暖化対策推進協議会」。市民や企業を中心に、関係団体と幅広く連携しながら活動を展開しているのが特徴で、再生可能エネルギー普及などの実践から学校などへの講師派遣といった啓発事業まで、取り組みも多岐にわたる。活動の現状や今後の方針、SDGsとの関わりなどについて、横浜国大大学院教授の松本真哉協議会会長に話を伺った(聞き手:波多野 寿生)



協議会の取り組みや今後の展開を話す松本会長
—横浜国立大学

松本 真哉会長に聞く

横浜市地球温暖化対策推進協議会

「まず、協議会の特徴についてお聞かせください。私が会長に就任したのは2016年からですが、それ以前からアドバイザーとして協議会に加わっていました。とにかく、行政や企業、市民団体などさまざまな立場の人たちが、温室効果ガスの削減に向けて多様な議論を繰り返している。そして、一緒に進んでいくという意識が、具体的に行動しているところを実際に見てきました。会長に就任してから、再認識したのはパートナーシップの重要性です。協議会に関わるようになった時、まず「日本の社会を変えよう」という多くの人が「具体的に何をすべきか」ということを考えている。これは「LED(発光ダイオード)電球の普及を図ったほか、横浜市と一緒に行ったHEMS(ホーム・エネルギー・マネージメント・システム)普及活動、現在も続く自治会と連携した家庭などからの廃食用油回収や普及・啓発を図るための区民まつりへの参加」など、多くの事業を展開してきました。もちろん太陽光発電の普及も、ですね。

「このほか、会員企業と連携した廃食用油回収にも継続して取り組んでおり、活動はここ1~2年、多くの企業や自治会などに広がってきているという。将来的には廃食用油による“地産地消型発電所”を作りたいとの構想もあり、さらに試行錯誤を続けている。こうした幅広い活動が評価され、昨年には「第25回横浜環境活動賞大賞」と「地球温暖化防止活動環境大臣表彰」を相次いで受賞している。同協議会の佐藤一子事務局長は「活動で大切なのは、さまざまな組織との連携。取り組み成果の『見える化』に向けたネットワークづくりを進めていきたい」と話している。(波多野 寿生)

「SDGsとの関連は常に意識しているですね。同キャンペーンでは障がい者雇用を支援する事業も含まれています。これは「8 働きがいも、経済成長も」に当たるという具合です。私自身のことを少しお話しすると、専攻は化学です。一見、協議会の活動とは関係ないのですが、以前から「ライフサイクルの考え方」の普及の研究に取り組んできました。例えばボールペンが何か

らできていて、その材料がどこから来て、どう作られ、世界とどう関わっているのか、を知ることは、これは非常に重要な考えです。そうした関係性は見えにくいですが、SDGsがあまり知られていないところから、化学的な視点でそうしたつながりがあることを教えてきました。商品を買うなど自分の行為に責任が

「エバンジェリスト」。先日セミナー取材でいただいた名刺の肩書だ。元はキリスト教の伝道者のことだが、IT業界で、難しい技術や製品を分かりやすく解説し、啓蒙する役割の人を指し、講演の案内などでも目にするようになった。ついでにホルダーを繰ると、出てくる、出てくる、難解な肩書。「アカウンターランナー」は企画営業担当編集長 春名 義弘

「エバンジェリスト」。先日セミナー取材でいただいた名刺の肩書だ。元はキリスト教の伝道者のことだが、IT業界で、難しい技術や製品を分かりやすく解説し、啓蒙する役割の人を指し、講演の案内などでも目にするようになった。ついでにホルダーを繰ると、出てくる、出てくる、難解な肩書。「アカウンターランナー」は企画営業担当編集長 春名 義弘

太陽光発電 多様な組織と連携へ

「具体化に向けて行動する会」をポリシーに、横浜市地球温暖化対策推進協議会ではこれまで、普及・啓発に向けてさまざまな活動を展開している。その中でも、とりわけ中心的な事業の一つと位置づけているのが太陽光発電の普及。「脱炭素化」を掲げる横浜市とともに普及キャンペーンを推進している。

具体的には、個人住宅向けに発電機や蓄電池の設置を後押ししているほか、事業者や福祉施設、自治会館向けに初期投資0円で設置できる事業も展開。すでに、環境印刷を推進する大川印刷(同市戸塚区)が第1号として導入を進めている。

さらに福祉施設向けとして、施設に屋根を提供してもらった上で参加事業者の協力を得て、障がい者に工事の一部を手伝ってもらった就労支援事業も視野に入れている。こうした対応を進めることで「温暖化対策」「電気代の節約」だけでなく、「災害対策」として電源の確保にもつなげたい考えだ。

このほか、会員企業と連携した廃食用油回収にも継続して取り組んでおり、活動はここ1~2年、多くの企業や自治会などに広がってきているという。将来的には廃食用油による“地産地消型発電所”を作りたいとの構想もあり、さらに試行錯誤を続けている。こうした幅広い活動が評価され、昨年には「第25回横浜環境活動賞大賞」と「地球温暖化防止活動環境大臣表彰」を相次いで受賞している。同協議会の佐藤一子事務局長は「活動で大切なのは、さまざまな組織との連携。取り組み成果の『見える化』に向けたネットワークづくりを進めていきたい」と話している。(波多野 寿生)

「SDGsとの関連は常に意識しているですね。同キャンペーンでは障がい者雇用を支援する事業も含まれています。これは「8 働きがいも、経済成長も」に当たるという具合です。私自身のことを少しお話しすると、専攻は化学です。一見、協議会の活動とは関係ないのですが、以前から「ライフサイクルの考え方」の普及の研究に取り組んできました。例えばボールペンが何か

らできていて、その材料がどこから来て、どう作られ、世界とどう関わっているのか、を知ることは、これは非常に重要な考えです。そうした関係性は見えにくいですが、SDGsがあまり知られていないところから、化学的な視点でそうしたつながりがあることを教えてきました。商品を買うなど自分の行為に責任が

「エバンジェリスト」。先日セミナー取材でいただいた名刺の肩書だ。元はキリスト教の伝道者のことだが、IT業界で、難しい技術や製品を分かりやすく解説し、啓蒙する役割の人を指し、講演の案内などでも目にするようになった。ついでにホルダーを繰ると、出てくる、出てくる、難解な肩書。「アカウンターランナー」は企画営業担当編集長 春名 義弘

「エバンジェリスト」。先日セミナー取材でいただいた名刺の肩書だ。元はキリスト教の伝道者のことだが、IT業界で、難しい技術や製品を分かりやすく解説し、啓蒙する役割の人を指し、講演の案内などでも目にするようになった。ついでにホルダーを繰ると、出てくる、出てくる、難解な肩書。「アカウンターランナー」は企画営業担当編集長 春名 義弘

ヨコハマ海洋市民大学



プラごみ対策、自分事に 「JEAN」の小島さん講演

講師は、30年近く前から、世界中の海岸に出掛け、漂着するプラごみ問題を解決していく活動を続ける「一般社団法人JEAN」(東京、事務局長小島あずささん)の小島あずささん。小島さんは、ごみに覆われた海岸や、たぐさんのプラごみが見つかっていた鳥の死骸などをスライドで紹介し、①分解しない残る②風に飛ばされる③劣化して細かい破片などプラスチックの欠点を挙

げ、「軽くて運ぶのに便利という利点があるが、逆に困った問題になっている」と話した。NGOや地元住民ら、回収の担い手の悩みも、下り道のない崖の下やハブのいる海岸では、拾いにくくも拾えない。人口濃く高齢化が進む地域では、漂着量に対して、人手が全く足りない。経費の問題も含め、現場では疲労感が漂っているという。小島さんは「環境中に出てしまつたら、まず回収できない。ごみを増やさない、ごみは拾うしかない」として、この問題を自分事にしようとした。訴えたワークショップでは、参加者全員が、自分ができる行動を考え、付箋に書いて発表した。(春名 義弘)

「エバンジェリスト」。先日セミナー取材でいただいた名刺の肩書だ。元はキリスト教の伝道者のことだが、IT業界で、難しい技術や製品を分かりやすく解説し、啓蒙する役割の人を指し、講演の案内などでも目にするようになった。ついでにホルダーを繰ると、出てくる、出てくる、難解な肩書。「アカウンターランナー」は企画営業担当編集長 春名 義弘

「エバンジェリスト」。先日セミナー取材でいただいた名刺の肩書だ。元はキリスト教の伝道者のことだが、IT業界で、難しい技術や製品を分かりやすく解説し、啓蒙する役割の人を指し、講演の案内などでも目にするようになった。ついでにホルダーを繰ると、出てくる、出てくる、難解な肩書。「アカウンターランナー」は企画営業担当編集長 春名 義弘

次回(25日)掲載予定